

イナंकフル（倅せ）＊ママクラス参加者の生き方と自己肯定感について

著者	加藤 千恵子, 石川 貴彦, 南山 祥子, 佐々木 俊子
雑誌名	地域と住民 : コミュニティケア教育研究センター年報
号	5
ページ	83-84
発行年	2021-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001892/

課題研究要旨

イナंकフル（倖せ）＊ママクラス参加者の生き方と自己肯定感について

加藤千恵子¹⁾＊ 石川貴彦²⁾ 南山祥子¹⁾ 佐々木俊子¹⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部看護学科 ²⁾ 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：ママクラス 自己効力感 自己肯定感（自尊感情） 生き方

1. はじめに

高村（2015）は、災害支援事業として、被災地の母子に対して、リフレッシュ＊ママクラスのプログラムを考案し、その効果について、実施直後から、受講生の自己効力感と自己肯定感は高くなり、6か月後も高いままであると報告している。地域では核家族化や少子化の深刻化、人口の流出入の変化などの影響による家族同士の交流の機会の減少、地域の育児支援機能の低下などにより、育児中の母親を取り巻く環境は大きく変化してきている。震災に関わらず、子育て中の母親が生き生きと子育てできるきっかけづくりとして、このプログラムを参考に、子育て中の母親、その家族への支援活動としてイナंकフル（倖せ）＊ママクラスを開催したい。そしてプログラムの効果について自尊感情、自己効力感や生き方に関する尺度などを使って評価し、質的にその会場で何が起きているのかを検証したいと考える。

2. 研究方法

- 1) 研究対象；プログラムへの参加者3人。
- 2) 調査内容；年齢、育児などの悩みの有無、フェイススケール20段階、自己効力感・自尊感情・生き方尺度を使用した。自己効力感は「全くその通り」から「全くあてはまらない」までの4件法、自尊感情は「そう思う」から「ちがう」までの4件法、生き方は「いつもあてはまる」「しばしば」「ときどき」「たまに」「全くあてはまらない」の5件法で調査した。
- 3) 分析方法；各項目を単純集計し、クラス実施前・後、1か月後の変化をIBM®SPSS®Statistics, Ver.24を用いてFriedman検定を行いその後、多重比較（Bonferroni法）を行う予定。
- 4) 倫理的配慮；研究の趣旨・任意性・匿名性を説明し、承諾を得、名寄市立大学倫理委員会の承認を得た。

3. 結果および考察

2020年度のママクラスの開催は1回のみ。この後、2回目、その1か月後に郵送調査となる。

1回目の現状の調査結果はグラフ（図1-3）参照。

4. 今後の課題と発展性

コロナ禍における地域の開催レベルがあり、何回か企画したが開催できず、Nスポ健康ステーションでの開催企画も中止となった。3月にレベル1となり、参加募集したが、3組の応募のみであった。残りの期間でできることは限られているが母子の状態を見ながら、2回目の開催、1か月後の郵送調査までこぎつけたいと考える。

今後、遠隔で行える部分の検討と母児が遠隔で集中できる時間などを考え、内容の細分化を試み、積み上げ型にできる部分の検討し、ママクラスの参加者間の交流が遠隔で簡単にできるシステム構築を目指したい。

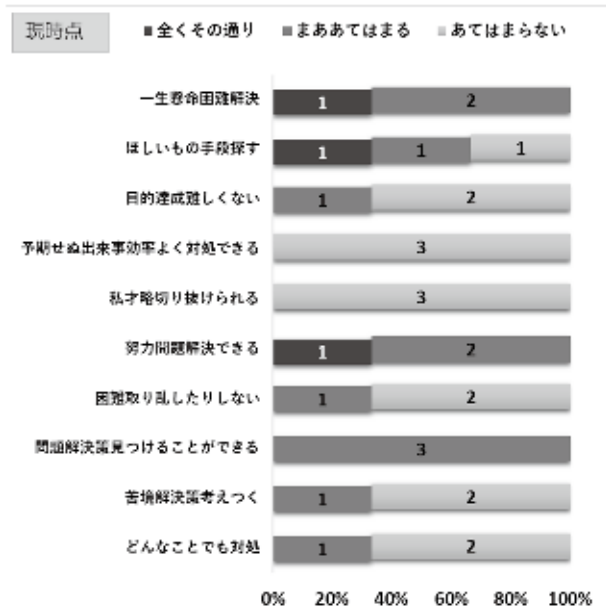


図1 参加者の自己効力感（現状）

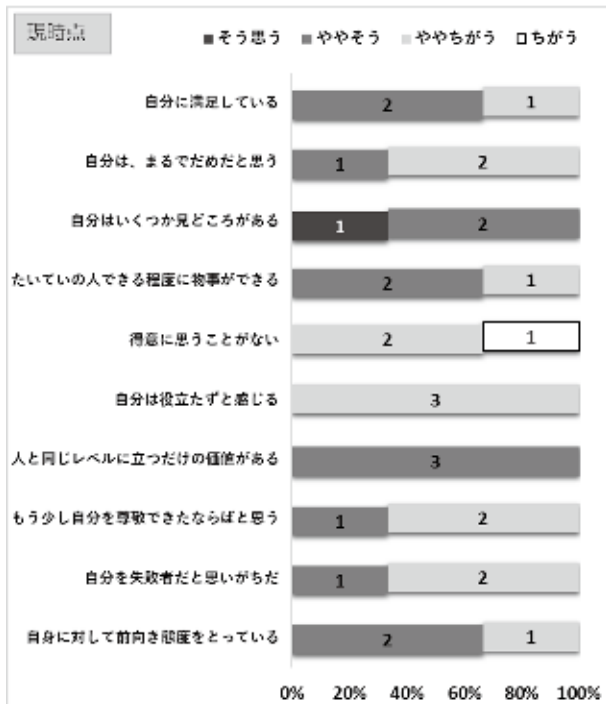


図2 参加者の自尊感情（現状）

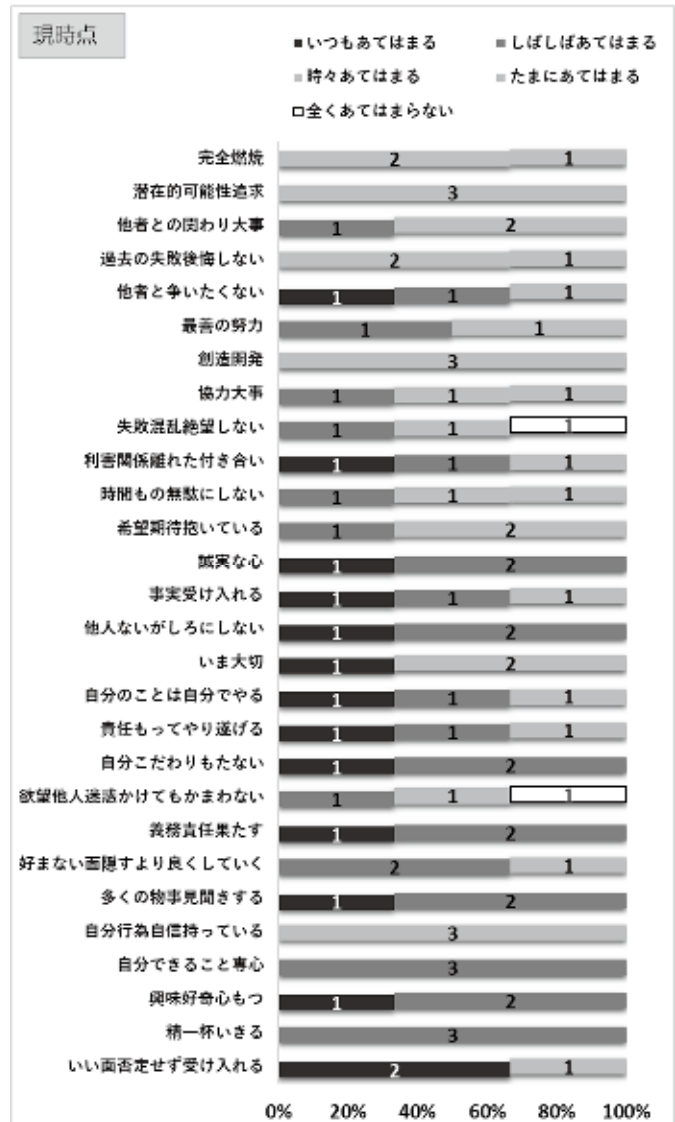


図3 参加者の生き方（現状）

引用・参考文献

高村寿子（2015）リフレッシュ＊ママクラス実践マニュアル，公益財団法人ジョイセフ。